

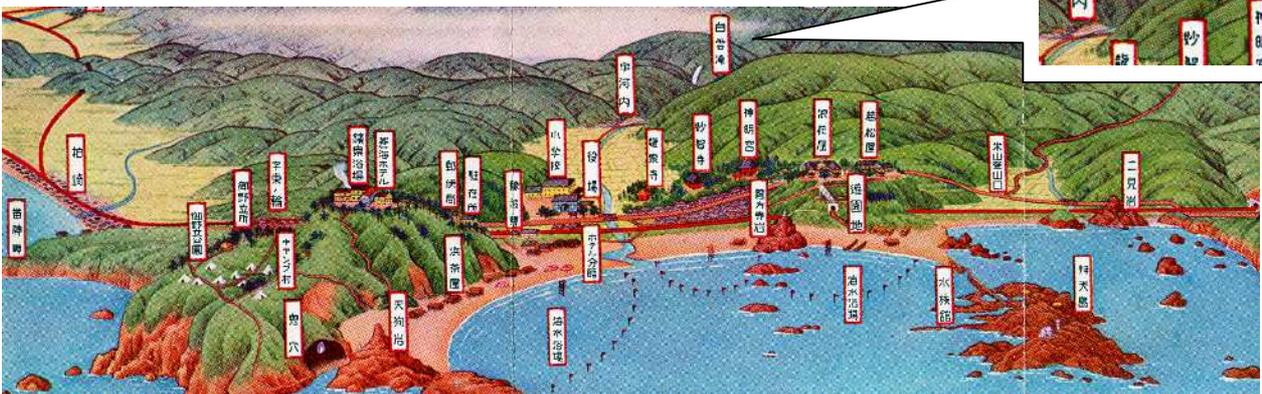
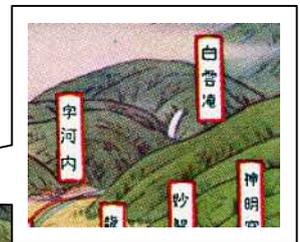
# 「柏崎の水」

## こうち 川内 白雲滝 その2

川内の白雲滝には男滝と女滝があり、“夫婦滝”との記述も見える。男滝はお滝、父滝などとも呼ばれ、「ふるさと鯨波」では、その姿を次のように記している。「お滝は落差5メートル、幅1メートル、Vの字型の滝で、ごうごうたる音と水量は、年中変わらず滝つばに落下している。水温10度、夏、手が痛む程の清水である。真夏でもここに入ると冷気を満喫することが出来る。」

滝のそばには、明治22年にこの滝を発見した栃堀七三郎の碑が建っており、「面影は滝こそ誰を呼子鳥<sup>よぶこどり</sup> 白雲大谷」などと刻まれている。

呼子鳥...人と呼ぶような鳴き声をする鳥。カッコウなどを指す。季語：春（「広辞苑」第五版より）



「海の鯨波」(昭和9年発行)掲載の鯨波鳥瞰図の一部 拡大部分に「白雲滝」とみえる

柏崎に上水道を敷設するにあたり、当時の水道界の権威、茂庭忠次郎工学博士が来柏し、水源予定地である白雲滝の調査を行った。これにより白雲滝付近が水源地に決定するのだが、この場所を見出したのは、上水道調査委員の野口善平氏であった。それまで、鵜川の上流や刈羽の砂山などが水源候補地とされたものの様々な理由で決定には至らなかった。そこで野口氏は、柏崎は山に近いので山から出る水が適していると考え、鯨波の水流を遡ったところ、白雲の滝にたどり着き、水源として充分であると見込みをつけたのである。

昭和5年7月3日、柏崎日報紙上に「白雲の滝を復活させて欲しいものである」という小さな記事が掲載された。その記事の内容は「この付近に滝は少ないので、滝開きでも行えば多くの観光客が訪れるであろう」というものであった。これに触発されたのか、その直後から、地元の人々によ

り、来訪者の便を図るための工事が行われた。道路の改修や道標の設置などが行われ、それまでより格段に通行しやすくなると、同26日には滝開きが催された。

鯨波から白雲滝の男滝までの道のりは、およそ4km。けっして近いとはいえない距離にもかかわらず、鯨波海水浴場の利用客が増加するにつれ、多くの人々がこの滝を訪れるようになった。往時には毎夏滝開きが行われ、茶店も出ていたという。しかし現在では滝へと続く道が消失したためか、その場所を知る人も少なくなり、まさに幻の滝となりつつある。

参考にした本

- 「ふるさと鯨波」鯨波地区郷土誌編纂委員会(224クシ)
- 「海の鯨波案内」鯨波保勝会(292クシ)
- 「柏崎市史 下巻」(224Kカイ)